

宗岡中だより



7月号 令和元年7月1日(月)
志木市上宗岡1-8-1 TEL 048-471-2241

「梅雨晴れに 学校総合体育大会 学総大の 歓喜湧く」

校長 佐藤哲浩

私の家から歩いて5分程のところに麦畑があり、今の時期は麦の実が熟し、麦畑は一面黄金色に染まっています。そして収穫されるのを待っているかのごとく、梅雨晴れに麦穂を伸ばしています。秋に稲穂が色づく姿も美しいですが、初夏の日差しを受けて輝く麦畑も、また違った魅力があります。麦穂を英語で spike (スパイク) といいます。陸上競技や野球の爪がついている靴を spike shoes (スパイクシューズ) と言いますが、この語源は麦穂のトゲトゲであるのです。



話は変わって、6月16日から20日まで朝霞地区の学校総合体育大会が開催されました。運動部の3年生にとっては、引退のかかる大きな大会です。私は14日の壮行会で、「迷ったら前へ、苦しかったら前へ、辛かったら前へ、後悔するのは後でよい」と話しました。それは試合では苦しい時ほどそれに立ち向かう人間力が大切だからです。この言葉は元楽天イーグルスの星野仙一監督の著書から引用した言葉です。

現役時代は「燃える男」、監督になれば「闘将」と言われた星野仙一氏、体に脈々と流れていたのは明大時代に島岡吉郎監督の下で鍛えられた人間力です。星野氏は、生まれたときに父親を亡くし女手一つで育てられ、寝食を共にした大学の合宿所でオヤジと思える島岡監督に出会います。そこで次のようなエピソードがあります。合宿所の便所掃除は上級生がやることに決まっていたそうですが、ある日便器がきれいになっていないことに島岡監督が激怒、星野主将ら上級生を集合させ、便所掃除の手本を示した。星野氏はその当時を振り返って、「お前たちには掃除一つにも“誠”の心がこもってない」といって監督自ら便器を洗い始めた、“それも素手で”。その時、改めて監督の人間力を感じたという。鉄拳の中にも愛情を持って指導していた星野監督は、島岡監督の薫陶を受け、監督としてあるべき姿をだぶらせていたのかもしれない。

大会中は本校の部活動がある競技をすべて応援して回りました。本校の生徒は、どの競技でも一生懸命取り組んでいました。1年生主体ながら最後まで諦めなかった野球とサッカーの試合、ほんの僅かの差で負けてしまったソフトテニスの団体戦、デュースのセットをもう少しで取れたバレーの試合、最後まで全力でプレーしたバスケの試合、今まで必死にやってきたからこそ涙を流し、絆を強くすることができたのです。今大会で引退する生徒、県大会に出場する生徒、いずれ引退するときはやってきます。これまで打ち込んできたエネルギーは、間違いなく人間を成長させています。